讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

文化通心

BUNKA TSUSHIN　2022秋 No.115

讃岐白峯寺と四君子苑

春は紅枝垂に牡丹、秋は芒に萩、冬は紅白梅に椿の珍種。美しい北村美術館のお庭「四君子苑」は、石造美術品の宝庫でもあり、讃岐白峯寺の五重塔も含まれています。今夏、館長の木下收先生は、それと対になるであろう、もうひとつの五重塔がある白峯寺を訪れ、特別に拝見させていただきました。※一般非公開

- 第8回 あ･うんの数寄講座
  茶の湯をさらに楽しむ夏期講習
- **財団三十年の歩み**
- **9月から11月までの茶華道情報／財団からのお知らせ**

発行：公益財団法人 中條文化振興財団
〒760-0017　高松市番町2丁目1番12号
TEL（087）826-3355　FAX（087）826-2212
2022年秋号　No.115　9月1日発行（季刊）

第8回

あ・うんの数寄講座

茶の湯をさらに楽しむ夏期講習

コロナ禍の3年目を迎えて、今年も第8回目の夏期講習を開催いたしました。茶の湯は、一生を賭けても到達することのない奥の深い世界ですから、様々な観点からの専門的なお話を聴けるチャンスは貴重だと思います。茶の湯の歴史は日本の文化の歴史と言っても過言ではありません。温故知新。機会あるごとに若い人たちにも伝えて頂けたら幸いです。

第1回　7月30日（土）

「一翁宗守とその周辺」

講師　木津 宗詮
（武者小路千家家元教授　卜深庵7代）

宗旦と三千家の成り立ち

茶禅一味を基調とするわび茶は、村田珠光が始め、武野紹鷗によって高められ、千利休が大成したとされています。

そして、利休は天正一九年（一五九一）豊臣秀吉の勘気に触れ、自刃して果てました。その息子、少庵は会津若松の蒲生氏郷に預かりの身となり、数年後に徳川家康の取りなしで赦免にされ、千家を再興するべく帰京しました。

利休の孫の宗旦は、十一歳の頃に大徳寺三玄院に入り、春屋宗園の喝食として侍していましたが、少庵が帰京すると、宗旦も還俗して千家に帰り、慶長五年（一六〇〇）ごろ、少庵の隠居にともなって家督を相続しました。しかし、宗旦は「けんぬん」の病、躁鬱症の感じで、四〇年以上に渡って茶の湯の活動は十分にできなかったようです。

寛永十年（一六三三）年、宗旦は五〇を過ぎてから、「一畳半床なし」の茶室を建て、大徳寺の江月宗玩や清巌宗渭、関白の近衛信尋を招き、茶の湯の活動が本格的に始まりました。

宗旦の茶の湯も、床のない茶室で、掛物も花も省いた究極の取り合わせで、「振舞いはきれいニ物は少なに可然候」と、道具がないなりに、茶の湯に対して常に正直であることを心がけねばならないとしていました。

その後、正保三年（一六四六）六十九歳で三男江岑に家督を譲って隠居し、さらに二畳敷きの隠居所（後の今日庵）で、茶三昧の生活を送り、承応二年（一六五三）に、今日庵を四男仙叟に譲り再度隠居しました。

さて、宗旦には、先妻の日安妙宗との間に、長男の閑翁宗拙と次男の一翁宗守。後妻の真巌宗見との間に三男江岑宗左と四男仙叟宗室の四人の息子がありました。

宗旦自身は生涯何処にも仕官はしなかったものの、子供たちについてはその出仕先を探して奔走しました。大徳寺や親しい大名などに周旋を依頼し、その甲斐あって、江岑宗左は紀州徳川家に、仙叟宗室は加賀前田家に召し抱えられました。

一翁の生涯

さて、木津宗匠は、『千一翁宗守』を書くために多くのことを調べ直していました。平成十五年に、武者小路千家と一翁が婿養子に入った吉岡家所縁の慧光寺において、過去帳と墓所石牌配当之図が発見されました。

慧光寺は、日蓮宗の古刹で、今回見つかった過去帳は、元和六年（一六二〇）以降に書かれたもので、一翁の養父母であり義父母でもあった、吉岡与三右衛門（道寿と妙寿）。さらに、日安妙宗は「宗守母」とあり、初めて実母が発見された貴重な資料となりました。そして、一翁本人と父宗旦。一翁の娘貞室宗寿と初代中村宗哲との間に生まれた一翁の孫は、永夏順清。恵雲妙龍は、裏千家の仙叟に嫁いだ一翁の娘。等なども記載されていました。

さて、もうひとつの発見は、過去帳に記載された「一翁宗守居士　吉岡甚四郎父七十二才　延宝四丙辰正月」。吉岡甚四郎は、一翁の息子で、武者小路千家二代の文叔の初名です。ここで、問題なのは、延宝四年（一六七六）享年七十二才。これまでの通説では、一翁の没年は延宝三年八十三歳とされており年齢の違いが十一歳もあることでした。

この過去帳が発見されるまで、一翁の生年は文禄二年（一五九三）、逆算すると宗旦が一六歳の時とされていました。しかし、宗旦は十七歳まで大徳寺で喝食を務めていたので、長男の宗拙のことまで考えると少し無理がありましたが、確たる証拠もなかったので、長らく訂正ができませんでした。

しかし、一翁の生年が慶長十年（一六〇五）。宗旦が二十八歳の時の子供であったとなれば、多くの矛盾が解消されると、茶道研究をされている熊倉先生や淡交会の筒井先生からも賛意を得られたそうです。

さて、もうひとつの資料「智照山墓所

石牌配当之図」は、文政十年（一八二七）に書かれた墓所の図面です。宗匠は稽古の合間に何度も墓石の確認に通われたそうですが、慧光寺では昭和五十年代に墓地の大幅な区画整理が行われ、図面の墓石の確認は難しかったそうです。それでも奇跡的に一翁の妻真浄とその息子太素。そして、もう一人の息子宗原の法名が刻まれた一基の墓石。また、一翁の義父道寿と妙寿の墓石は、立派な五輪の塔が見つかったそうです。慧光寺に供養されたのは、吉岡家と関係が深かった一翁と文叔の子供までに止まり、文叔の死後には、妻の光旭によって聚光院に千家の菩提寺が移されました。

一翁は、蒔絵屋の時代には吉岡甚右衛門という名前で活躍し、寛永十五年（一六三八）三十四歳の頃から主人となりました。たくさんの職人を抱えて、京都のみならず、江戸の日本橋呉服町にも宿所出店を作り、手広く商売をしたそうです。一方で宗旦や勘当された兄宗拙の世話もしていました。

また、この時代に鹿苑寺や相国寺の住職を務めた鳳林承章の下にも通い始めていました。

最初は、正保三年（一六四六）に、一翁の参禅の師であった玉舟宗璠とともに鳳林承章を訪ねて接待を受けました。承章が残した日記『隔蓂記』には、甚右衛門が、宗旦の息子であったことも記録されています。

玉舟宗璠は、大徳寺一八五世住持で、一翁の師でありながら、茶の湯や詩歌の会、行楽などもともにして、非常に懇意な間柄であったようです。そして、「一翁宗守」の道号も授けています。

「一を守る翁」は、全てを極め真理を掴んだ境地を守る人になって欲しいとの思いから選定されました。時は、慶安二年（一六四九）、一翁四十五歳に、甚右衛門は「吉岡宗守」となり、これを機に剃髪して、吉文字屋の家業からも隠居したそうです。

承応三年（一六五四）一翁は、五十歳で銀座に有り付きます。銀座とは銀貨の鋳造と検査を行う幕府の貨幣鋳造機関です。一翁の銀座衆への有付きは、宗旦の意向で各方面に斡旋の根回しが行われ、当時江戸にいた江芩にも後押しをさせたそうです。これは、江戸での需要が一巡した蒔絵屋の仕事が廃れてきた事に起因していました。

万治元年（一六五八）宗旦が八十一歳で没しました。これを機会に一翁は千宗守と千にもどりました。

『松平家請』によると、「寛文四辰十一月十三日、被召出百俵拾人扶持、被下茶道頭列」とあり、一翁六十歳の時に、高松松平家に仕官しました。千家の人間に戻って六年。利休以来の茶の湯の継承をするだけでなく、より広く世間に伝播させなければならないという思いが、仕官を選択する動機だったかも知れません。

官休庵は、武者小路千家を象徴する最も大切な茶室であり、一翁好みとして唯一今日に伝わる茶室です。この茶室の建立は慶安二年で、まだ一翁が吉岡人右衛門の頃でした。宗旦が指導して、一緒に道具集めもしているので、宗旦の意向も反映されているかも知れません。

安永元年に焼失した官休庵は、その二年後に一翁の百年忌を控えた大事な時で、当時の家元七代直斎は流儀をあげて再建しましたが、官休庵の席名の由来を大徳寺の三百九十世真巖宗乗に依頼しました。その内容が、「一翁は茶に専念するために官を辞した」とあり、そのことで松平を辞した時というように定説となってしまいました。しかし、一翁が松平家を辞職した記録はありません。一翁が松平家に仕官したのは宗旦が没して六年後のことですし、宗旦が揮毫した「官休」の扁額は仕官する以前のことですので、松平家とは関係ないと思われます。

宗旦は、江芩と仙叟をそれぞれ大名家に仕官させ、一翁には少し違う道を歩ませました。この時の千家は、宗旦を中心に家族全体で、利休の茶の湯を守り伝える事を目標に奔走しています。一翁は宗旦の晩年まで一緒にいて、父を支えましたが、宗旦は江芩には、一翁について文句ばかり手紙に書きました。この頃は、まだ、三千家のように別れていたわけではなく、千家全体で大きな目標に向かっていた時期だったのかも知れません。

（中條晴之）

第2回　7月31日（日）

「なぜ茶の湯に露地が付きものなのか」

講師　今江 秀史（京都市文化市民局元離宮二条城事務所・文化財保護課（兼務））

茶の湯と庭のつながり

露地の主な役割は茶会場の出入口と茶室を繋ぐこと、中立の受け皿となることの二点で、それを担うようになった経緯を見ていきます。

茶の湯に伴う庭は、伝統ある町中で見られる表通りから宅地の奥へ続く細長い路地でもあります。一般に「庭園」と呼ばれる築山と池を持つ庭とはかなり違いがありますが、多くの解説書では茶の湯に伴う庭＝露地と庭園をごちゃ混ぜにしてわからなくしています。では、露地が庭園でないならば、一体何なのか？

単にお茶を飲んだり食事をする分には庭など必要ないのです。マンションの一室

でお稽古をすることもあるし、野点であれば茶室すらいりません。茶の湯において庭が不可欠となるのは、参加者が互いに心を通わせながら喫茶や食事をする場合にかぎってきます。そもそも住宅に庭が付き物なのは現代のように電灯や空調が整ってない時代の家屋に、風と光を取り入れる役割のために設けられたのです。

貴族住宅では、一棟ごとに独立した建物が廊下でつながり、庭は四方に設けられていました。主要な建物の前面には儀式等のための敷地「大庭」、建物と廊下にかこまれた一画は「坪」、建物の周りにできた余地は「屋戸」と呼ばれ、そこでは公私にわたる儀式や射的や競馬や宴会などに使うための敷地が確保された上で、建物や塀の際あたりに樹木や草花を植え(前栽)、季節感を得たり詩歌の題材としました。平安時代の貴族住宅の作りと茶の湯に伴う庭は、露地の成立事情と一貫性が認められます。

喫茶から茶の湯への幕開け

日々の生活の中で、来客の際は茶菓を出したり、外出先で喫茶店に立ち寄って休憩することはよくあります。しかし、なぜ露地を用いる茶会が「塵外」と言われる世俗からかけはなれた特別な意味合いをもって来たのでしょうか。

茶事は初座・中立・後座と移ります。茶室と露地は清浄に保たれ、床は掛物と生け花で飾られ、茶事を滞りなく進めていくためには参加者たちが互いに一定の作法「儀礼」を身につけていることが求められました。

現在の茶会に繋がる大枠が定まったのは十五世紀初期で、宴会の席で食事や酒と喫茶が楽しまれており、庭の使い方が現れてきます。宴会は珠御簾(たまみす)や帷(とばり)で飾られた建物で行われ、周囲には白砂敷の庭が配されていました。初めに、そうめんや山の珍味の食事と酒・果物が出され、その後、休息のため退出し、池に張り出した泉屋で涼みます。その後「喫茶の亭」と呼ばれる建物に移動し茶会が開かれ、管弦を交えた酒宴へと移っていきます。このような宴会で飲食と喫茶が二部制になっていること、しかもその間に泉屋のある庭が使われていることが、後の初座と後座の間での中立に露地が使われることに通じます。

露地の成立へとつながる三つの事柄

縁側と広い間口を持たない専用茶室は茶の湯のためだけに生まれてきたもので、その成り立ちにおいて個人の好みに留まらず、茶会での共同の使い方や主客の間合いに配慮して定まってきたことがわかります。一方、露地の成り立ちはその型が定まるまでの記録と根拠が乏しいため、よくわかりません。露地と専用茶室の成り立ちが、宴の中で行われる茶会に加えて「北野大茶会」「山里」「市中の山居」の三つの事柄の影響を受け、侘び茶に欠かせない場の受け皿として露地が生まれていたと考えられます。

天正十五年に秀吉が北野天満宮で全国から多くの茶人を集めて行った北野大茶会で、公家や武家はもちろん町人や百姓まで募られました。その主な目的は秀吉が集めた茶道具を披露することで一日しか行われませんでしたが、茶の湯に興味のなかった人々に影響を与えました。

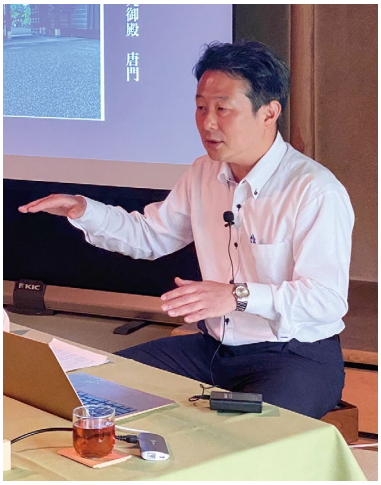
北野大茶会で茶の湯に取り組む人の裾野が広がったことで玉石混交の事態になり、真剣に茶の湯の考え方や方法を深めようとする人々はそれに相応しい落ち着いた場を模索していきました。茶の湯の心得を一つにする者たちは「一座建立」を設け四畳半の茶室の大きさや縁側、開口部でさえも無駄と考えました。こうして造られた山里は、城郭内に設けられた疑似的な里山で、そこに木々が植えられ茶室に至る長く直線的な園路が設けられました。

世知辛い世の中で一時の安らぎを得たいとの思いを町衆も持ちました。ところが、彼らは町屋が立ち並ぶ市街地に住んでおり、落ち着いた環境を整えるための土地の確保には限界がありましたが、彼らの執念は山麓での落ち着いた暮らしぶりを市中で成り立たせる方法へと漕ぎつけます。これこそが市中に現れた里山の庵＝市中の山居、茶の湯の理想郷なのでした。

露地の原型と展開

町屋で表通りから茶室に行くには隣家との間の細長い路地が使われ、奥へ進むと「脇ノ坪内」と呼ばれる屋根付きの土間へと至り、そこから引き戸を介して「面坪ノ内」と呼ばれる縁側から上がって茶室に入ります。この二つの坪内が露地の前身といわれています。そして、利休の時代になると、縁側が除去され格式の高い書院建物から茶室は完全に分離されます。その結果、茶室の入口に刀掛けが備わり、縁側が腰掛待合になり、手水鉢や灯篭などが路地内に配置されました。このように、露地とは通路としての意味合いが強かった路地と脇坪・面坪ノ内に樹木が植えられ工作物が置かれる過程で庭のようになったと考えられます。

侘び茶は書院座敷の裏側に当たる私的な場所で催されてきましたが、利休らによって専用茶室は公的な催しのために使われる傾向が強まり、その最たるものが江戸時代の将軍による利用で、「茶の湯御成」と呼ばれました。普通、将軍は御成御門から入場して書院建物の中の対面所で接見するのですが、茶の湯御成はい



きなり露地から茶室にいり茶の湯を行うものでした。このため、将軍が装束を整えたり従者たちの待合が必要となり、露地が二重・三重と作られ、複雑な構造をもつようになりました。つまり、茶の湯の露地とは、縁側が担っていた機能を露地を造っていくことで解決し、庭化したものと言える。

「使う庭、使う露地として考え、手入れしていくことが大切です」と締めくくられました。

（千葉規美子）

第3回　8月7日（日）

「利休と秀吉　黄金のわび」

講師　橋本 麻里（公益財団法人永青文庫副館長）

第3回の講師は金沢工業大学客員教授で日本美術を主な領域としてライター、エディターとして歴史物のテレビでも活躍中の橋本麻里氏です。今回は秀吉と利休の関係を黄金の茶室を通して解説していただきました。

黄金の茶室といえば足軽出身で成り上がりの秀吉がその権威を象徴するためだけに作らせた豪華絢爛だが下品な茶室というイメージもあるのではないだろうか？その茶室は平三畳で容易に運搬できるような組み立て式であった。初見は天正十三年の大阪城だがその時は茶室を組み立てて城内でお披露目しただけらしい。

利休は天正十年の本能寺の変以後秀吉に仕えており、十一年に秀吉が近江坂本城で開いた茶会で初めて茶堂を勤め、十二年には大坂城内の庭園空間である山里に二畳の茶室を作っている。そして十三年十月の秀吉の正親町天皇への禁中献茶に奉仕し宮中参内するため居士号「利休」を勅賜された。この年に利休が黄金の茶室の設計を始めたといわれている。ここで謎が深まる。一般的に清楚で質素な生活を宗とし、物の不足のなかに心の充足と美を求める思想である侘びを大切にしてきた利休がなぜ成金趣味だけの下品といわれる黄金の茶室を設計したのか、ということである。

黄金の茶室は翌一四年に年頭の参内で御所に運び込まれ正親町天皇に披露され黄金の茶道具を用いて茶会を行ったとされています。黄金の茶室に黄金の茶道具、なんという成金趣味、下品極まりない。文字だけを並べるとこんな感想が一般的ではないでしょうか。

今年三月に佐賀県の名護屋城博物館に復元され話題になりましたが、秀吉の黄金の茶室にとどまらず復元された黄金の茶室は各所に存在しています。その第一号が静岡県の熱海市にあるＭＯＡ美術館です。ここでは史料に基づき堀口捨己の監修により早川正夫が復元設計を行い再現されており、壁面は金箔ではなく金板で作られており使用した金の総重量は六〇キロを超え、茶道具も金細工で作られています。

通常は茶室内に入ることはできませんが、講師の橋本氏は特別に茶室に入り、そこで感じたことがそれまでの黄金の茶室に対する思いが覆ったそうで、それは違和感の無さ。茶室だけを見ると豪華絢爛、黄金の茶道具だけを見ても豪華絢爛。それぞれを見ると成り上がり物の作った成金趣味の茶室というイメージですが、茶室に座るとその全てが一つになり違和感がなくなり、存在感も少なくなり、中にいる人々だけが意識されてくるという不思議な空間だったそうです。

利休の侘びとは「物の不足」つまり過剰なものをそぎ落とした状態の中に美しさを見出す心が「侘び」といえるでしょう。天正一四年に行われた正親町天皇を招いた茶会、そこで使う茶道具はどういうものが適切なのか考えた時に、現存の茶道具を使うという判断はあるのでしょうか。他者が使った茶道具で点てたものを他者が使った茶碗で天皇がお茶をいただく。そう考えた時に新しい茶道具を作り振る舞う。それが正しい秀吉と利休の判断だったのではないでしょうか。どうせ新しく作るなら最大限お迎えするために黄金で作る。しかし黄金の茶道具を侘びと考えられる今までの茶室で使うとどうなるでしょう。色が抑えられた茶室の中に輝く黄金の茶道具。これは利休の考える過剰なものをそぎ落とした侘びにそぐいません。黄金の茶道具の絢爛さをそぎ落とすための黄金の茶室。そう考えると黄金の茶室に利休が関わったと考えても不思議ではないと橋本氏は感じたそうです。

黄金の茶室はその後天正一五年の北野大茶会に持ち込まれ、その中に「似たり茄子」などの秀吉自慢の名物を陳列したといわれている。天正二〇年には朝鮮出兵のために肥後名護屋に出陣した折には大阪から運び茶会を催したとされています。黄金の茶室が史実に残っているのはここまでで、大阪城陥落の時に消滅したといわれています。

今までの黄金の茶室に対する評価を自らの体験から覆す橋本氏の講演はとても興味がわき、一般的な評判やネットなどから受け取る一方的な評価ではなく自ら体験することによって得られる感性の大切さを再認させていただきました。

先述の佐賀県の名護屋城博物館の黄金の茶室では茶室内で抹茶を楽しめる体験プログラムを来年三月末まで開催中です。九州に行く機会があれば秀吉と利休の最高のおもてなしを体感されてはいかがでしょうか。

（香川二郎）

財団三十年の歩み

平成五年十月に故・中條晴夫氏によって設立された当財団が、今年、三十周年を迎えました。その間、基本理念を変えることなく、それを体現する幾つもの新しい試みの活動を続けて参りました。みなさまのご支援あっての財団運営でしたが、これからも変わらぬご後援をお願いしつつ、この三十年の足跡を振り返って見ました。（後日、三十周年記念誌刊行を予定）

創立者・中條晴夫氏のふるさと讃岐香川の文化に対する熱い思いは、財団法人中條文化振興財団設立時の定款にうたわれた「地域文化の創造継承と振興に資する事業を行い、活力ある地域文化の創造に寄与することを目的とし、意識の啓発、活動の奨励、情報の収集・提供、茶道文化会館及び茶道文化の普及、伝統文化の継続・保護を行う」に沿って、本分を守りながら斬新に話題性のある展開を広げて参りました。（政府の公益法人改革に沿って、平成二十二年に公益財団法人中條文化振興財団に移行）

「文化は人なり」

常々、中條晴夫氏がよく口にされた言葉です。香川の経済界を牽引してきた実業家の語る文化論は事業は人なりの経営哲学を踏襲して、財団経営のさまざまな場面で、まさに「文化は人なり」を痛感させてくれました。財団賞や助成金授与式の折々に、文化を支えてきた人たちやこれからを支える者たちのご苦労や英知に、心からなる賞賛とささやかな支援を続けて参りました。

平成九年四月に活動拠点の茶室「美藻庵・晴松亭」が完成し、武者小路千家官休庵家元不徹斎宗匠による席披き以来、十周年、二十周年の節目の茶会やお正月の初釜を筆頭にした月釜、自由参加の月に一度の喫茶室などと並行して、貸し茶室事業のご利用は、個人茶会やお茶の稽古、音楽会や花展、絵画展などユニークな会場に展開して行きました。どの席でも亭主のもてなしと客の感謝でなる一期一会の裏にたくさんの人たちのお力がありました。（建築は現代の名工と謳われた京都の数寄屋研究所・心傳庵木下孝一棟梁）

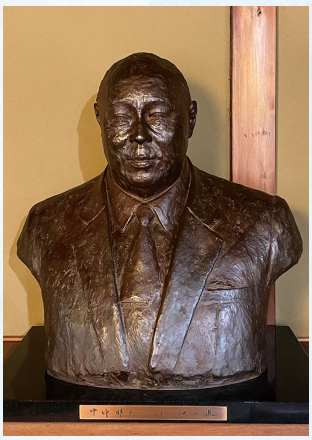
平成十七年からは連続十回、あ・うんの数寄大茶会を企画実施しました。高松市内のあちこちの会場を専用バスでつなぎ、一枚の茶券で茶席巡りというスタイルは年を経るごとに地域を拡大し、フェリーのチャーター便を添えて海の大茶会と銘うって瀬戸の島々まで乗り出しました。十年で一区切りをつけた大茶会は、若人茶会と讃岐ものとして玉藻公園披雲閣に場を移して継続中です。これこそ、大勢のスタッフに支えられて、一碗の茶でもてなす茶の湯の世界も文化は人なりを証明してくれました。

文化活動意識の啓発として、日本文化を語る各界の人たちからご講演いただいたあ・うんの数寄講座はたいへん好評で、数々の珠玉の講演内容を惜しんで上梓の運びとなり、出版事業は探訪・香川の茶室、くにものなどに続きました。講座は今も暑気の中、茶の湯をさらに楽しむ夏期講座あ・うんの数寄講座として継続中です。この時の講師の先生方から美術館や秘蔵のお道具をお持ち出しの茶席をご担当いただけるなど輪の広がった文化は人なり、ご縁の繋がりをみなさんに喜んでいただけました。

情報の収集・提供として、創立以来、機関誌文化通心を季刊してきましたが、二十五周年を記念してスマホで見るイベントカレンダーおいでまい香川の運営を始めました。媒体を変えたことによって文化は人なりは無限な広がりを見せて進行中です。（平成二十二年には発足以来の活動が認められ、香川県文化芸術選奨を受賞）

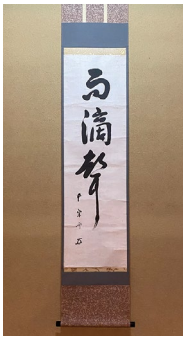
駆け足の財団三十年の歩みでしたが、紙面の都合で割愛した活動詳細や財団の親睦を図ってきた晴友会のことなどは、記念誌発行の折に登載させていただきます。

平成9年4月の茶席披きの際、武者小路千家家元不徹斎宗匠に供茶を頂きました。



お茶の風景（17）

音と声



平家一門の栄華と滅亡を描いた「平家物語」は祇園精舎の鐘の声…と紐解かれます。この美しくも哀しい戦記文学に初めて接した時、なぜ鐘の音ではなくて鐘の声なのだろうと不思議でした。年を経て、無機質な鐘を擬人化して音を声と表現したように、谷のせせらぎを渓声、漢詩「春暁」の一節・矢来風雨声などと同じ作詩の技法と理解しました。

ところが夏の茶席で、武者小路千家十三代家元揮毫の「雨滴聲」の掛物を拝見しました（聲＝声）。通常なら雨滴音という場面で、なんと美意識あふれた言葉遣いかと、これまでの小賢しい理解ではなく、素敵な言葉の鮮やかさに素直な感動がありました。

絵画や写真の雨は見たままだけの景色に限定されますが、有隣斎宗匠の墨は幾通りもの雨の風景、例えば、降り始めに土に落ちる重い雨、軒下をしずく静かな雨、傘に降りかかってはねる雨、木の葉を揺らせて騒ぐ雨…などの光景をフラッシュバックさせて、さまざまな声を聞かせてくれたような気がしました。

お菓子な話　その52

ほくほくさつまいもの甘納豆

スーパーなどで通年目にすることの多いさつまいも。収穫時期は品種によって多少ずれはありますが、8～11月頃。一方食べ頃は、10～1月頃といわれています。

これは、収穫直後のさつまいもは水っぽく甘みが少ないため、2～3か月ほど貯蔵することで、余分な水分が抜けて甘みが増し、その頃が食べ頃となるからのようです。

そんな食べ頃の時だけお店が開店する“村瀬食品”さんの鳴門金時を使った『いも甘納豆』。

『いも甘納豆』は水とグラニュー糖を沸かした中にさつまいもを入れひと煮立ちさせ一晩寝かすという工程を数回繰り返し、蜜が染み込んださつまいもの蜜を切り、そのあとオーブンで焼き、乾かしグラニュー糖をまぶして乾かすそうです。

そんな、手間ひまのかかった『いも甘納豆』は砂糖が凄く染みていて、外側はサクッ中身はホクホクッ甘いけど癖になります！

財団行事予定（9月～11月）

休館日水曜日

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、急遽中止になる事もあります。お出かけの前にご確認ください。

9月

◆ **書道教室**　森本義人先生
9月2日・16日・30日（金）午前10時～12時

◆ **和菓子講座**　毎月第2金曜日
高橋初乃先生
9月9日（金）午前10時～12時

◆ **ヤングヤング（子供茶の湯教室）**
毎月第2・第4土曜日　山下純子先生
9月10日・24日（土）　午後1時～

◆ **月に一度の喫茶室**　毎月第3火曜日
9月20日（火）午前10時～午後2時（受付）
自由なお時間にどうぞ（ランチは要予約）。

10月

◆ **10月月釜　五人様茶会**
年月が過ぎても尚、席中のドラマが深く心に刻みつき、決して忘れることなく懐古して笑みがこぼれる茶席になれば幸いです。
日時　10月2日（日）
処　　美藻庵　晴松亭（当財団茶室）
濃茶　六茶庵　高畑 昭
薄茶　石州流讃岐清水派石州会
　　金澤和子
会費　6,000円（濃茶・薄茶・点心席）
入席時間（各席6名・2時間15分を予定）
第1席　9時　　第2席　10時30分
第3席　11時15分　第4席　12時45分
第5席　14時15分　（各席A席・B席）
申込　電話受付9月12日（月）10時～

◆ **財団賞授賞式・助成金交付団体認定書授与式**
10月3日（月）午前10時30分～

◆ **懐石講座**　三友居　山本勝先生
10月4日（火）午前11時・午後3時

◆ **ヤングヤング**　山下純子先生
10月8日・22日（土）　午後1時～

◆ **和菓子講座**　高橋初乃先生
10月14日（金）午前10時～12時

◆ **月に一度の喫茶室**
10月18日（火）午前10時～午後2時（受付）
自由なお時間にどうぞ（ランチは要予約）。

◆ **書道教室**　森本義人先生
10月21日（金）午前10時～12時

11月

◆ **書道教室**　毎月第1・第3金曜日
森本義人先生
11月4日・18日（金）午前10時～12時

◆ **和菓子講座**　高橋初乃先生
11月11日（金）午前10時～12時

◆ **ヤングヤング**　山下純子先生
11月12日・26日（土）　午後1時～

◆ **11月月釜　五人様茶会**
コロナ禍で色々制約がございますが、お気楽にお越し頂けたらと思っております。心をこめてお待ちいたしております。
日時　11月13日（日）
処　　美藻庵　晴松亭（当財団茶室）
濃茶　裏千家　綾 宗博
薄茶　裏千家　口入田宗美
会費　6,000円（濃茶・薄茶・点心席）
入席時間　10月五人様茶会と同様
申込　電話受付10月17日（月）10時～

◆ **月に一度の喫茶室**
11月15日（火）午前10時～午後2時（受付）
自由なお時間にどうぞ（ランチは要予約）。

茶華道ガイド

急遽中止等の変更となる場合があります。

茶道裏千家淡交会高松支部　TEL（087）841-0605

＜淡交会高松支部月釜＞　前売券のみ・入席時間指定

大西・アオイ記念館　800円　9:30～15:00

9/4　席主：高吉宗瞳

10/2　席主：塩谷宗恵

11/6　席主：松本宗弘

武者小路千家香川官休会　TEL（087）862-8574

＜香川官休会月釜＞　無量寿院　700円　9:00～15:00

9/4　席主：嶺松会

11/6　席主：男子組

高松市香南歴史民俗郷土館　TEL（087）879-0717

＜由佐城月釜茶会＞

入席時刻指定の前売券のみ（茶会7日前まで販売）

第2研修室（和室）　600円　9:30～（全6席）

9/18　席主：真子宗博（表千家）

10/16　席主：片岡宗秀（茶道石州流宗家高松会）

11/20　席主：田中宗瑞（裏千家　高畑宗稔社中）

料亭二蝶　TEL 0120-86-0220

10/19、20　名残茶会（予約制）席主：山本守蝸（武者小路千家）

栗林公園日暮亭　15,000円　10:00～（全2席）

11/3　季楽茶会（予約制）席主：山本守蝸（武者小路千家）

料亭二蝶　10,000円　9:00～（全4席）

財団からのお知らせ　中條文化振興財団

令和4年度 第30回財団賞決定のお知らせ

今年度の財団賞には5件の推薦があり、審議の結果、次の2件に決定いたしました。

● 榊原 佳代子（当財団 妹尾共子理事推薦）

2005年、八栗ケーブル登山口駅を越え、表参道を150mほど登ったあたりに接待所「仁庵」を私費で建設され、庵主として歩き遍路の人々にお接待を続けています。また、市井の交流の場としても提供し、かくれたお遍路文化の一翼を担う活動を続けています。

● 三好 兼光（観音寺市教育委員会教育長推薦）

就職して島を出ましたが、生まれ故郷「伊吹島」の歴史・民俗が失われつつあるのを苦慮し、帰省の度に資料集めや研究を重ね、数々の研究資料として発刊してきました。定年退職後は伊吹島に戻り、海上タクシーを経営しながら研究して得た知識を後世に伝えるために日々ご尽力されています。

中学・高校・大学の茶道部の皆様へ

財団の茶室「美藻庵・晴松亭」は、貸し茶室として、どなたでも利用していただけます。茶室としては本格的な数寄屋造りで、大寄せの茶会や個人的な茶事など、どちらでも使えるように工夫されています。

財団では、平日はお茶の教室や、財団主催のいろんな講座でご利用いただいておりますが、土日は、茶会のために貸し館のスケジュールを開けています。

コロナの影響がどれくらい続くのかは、わかりませんが、「若人茶会」も三年間開催できない状態で、これまでご参加いただいた高校の茶道部でも経験者が卒業されて、継続が途切れてしまいました。

若人茶会も新たなやり方を模索する必要がありますが、まずは県内の学校茶道部の皆さんのお稽古やお茶会の場として、茶室を積極的に開放していきたいと考えております。

つきましては、県内の学校茶道部の生徒さんやご指導の先生方で、ご希望の方がいらっしゃいましたら、遠慮なく事務局までご相談、お問い合わせください。

編集後記

記録的な短い梅雨、それに加えての少雨。四国の水瓶・早明浦ダムの貯水量も低下の一途をたどり、渇水の象徴とも言える旧大川町役場の建物が現れました。この状態を見るたびに、水没した地区のことを考えてしまいます。そこには自然と共に人々の日々の生活や受け継がれてきた伝統ある行事が有ったはずなのに、失われていくのはとても惜しいことです。県内でもそのような事例があるのではないでしょうか。

当財団は県内の様々な伝統文化や行事を助成し掘り起こし、またそれらに携わる方々を取り上げて発信しています。情報をお寄せくだされば幸いです。

［声・情報お寄せください］
〒760－0017
高松市番町二丁目一－十二
公益財団法人 中條文化振興財団編集部
TEL（087）826－3355
FAX（087）826－2212
info@chujo-zaidan.or.jp

「文化通心」第116号は2022年12月1日発行です。